

石川淳「処女懐胎」論

——貞子の造形をめぐって——

野村尚子

はじめに

「処女懐胎」は、石川淳が一九四七年九月から一二月にかけて文芸雑誌『人間』に連載した作品である。題名からも明らかのように『聖書』に取材したイメージが取り込まれている。『聖書』に基づく石川淳の作品系列に含まれるものとして、他に「焼跡のイエス」(『新潮』一九四六・一〇)、「かよひ小町」(『中央公論』一九四七・一)などが挙げられるが、その中でも本作は、「一つの頂点を成す」ものと評価されている。実際、本作と『聖書』の関わりは、無視できない要素としてこれまでも多く論じられてきた。

たとえば、佐々木基一「『処女懐胎』その他」^②を始めとし、井沢義雄「処女懐胎」や野口武彦「見立て創世紀の世界」^④で指摘されるとおり、「処女懐胎」の主人公貞子が「聖母マリア」と重ねて描か

れていることは確かである。「処女懐胎」という題名にはもちろんのこと、他にも『聖書』からの引用文、モチーフの借用や登場人物の会話によって、『聖書』が直接的に導入されている箇所が確認できる。そして、この主人公は清らかな処女として、つまり「聖母」として描かれているように受け取られがちである。

しかし、主人公は一概に聖母的な側面を備えているとは言い難い。本稿では、主人公貞子が「聖母マリア」とどのように関連しているのかを紐解いたうえで、貞子の新たな側面を検証したい。

一 貞子の造形

まず、本文異同について考察したい。初出誌『人間』と初刊本『処女懐胎』^⑤、そして石川淳の生存中に刊行された『石川淳全集』第二巻との間には、数力所の異同が認められる。なかでも重要と思わ

れる異同は、主人公貞子の自称である。初出誌および初刊本では、すべて貞子は「あたし」と称している。しかし『全集』において、これらがすべて「わたくし」に改められているのである。なお、この『全集』は初刊本『処女懐胎』を底本とし、さらに作者によつて表記表現に手入れがなされたことが明らかであり、貞子の自称に関わる変更はこの時点で行われた。

石川淳自身が述べているように、貞子は「イメージだけで、これからどうなるといふ予想なし」^⑧に書き始められたため、初出誌においては性格設定の確定が充分にはなされていなかったと考えられる。このことは貞子が姉の福子を、初出誌においては「ねえさん」^⑨と呼び、初刊本においては「おねえさま」と呼んでいることから窺える。

いずれにせよ『全集』に見られる「わたくし」の自称は、一見すると、いかにも貞子が改まった態度をとっているかのような印象を与える。つまり、この異同は、あたかも貞子の聖なる性質を表現するためのものであるかのように捉えることができるのである。しかし、実際の貞子は、後述するように必ずしもそついった性質を備え合せていないことに留意する必要がある。あえて貞子の自称を「あたし」から「わたくし」に変更することにより、実際に描かれている聖なる女性とは言い難い貞子像とは異なり、そこから反転さ

せられた女性である貞子像を表現したといえる。

次に、主人公の「貞子」という名前について考察したい。貞子は、この名前から連想できる人物像からはかけ離れた存在といえよう。

貞子が父、姉、ピアノの師匠らと接する態度からは、「貞」淑や「貞」操といった性質を読み取ることは不可能に近い。むしろ作品冒頭の場面においては「芸者」^⑩という印象すら受けるほどである。

同じことは、「夫はこれもいくさ押しつまつて樺太におくられて、その後どうなつたのかいまだに消息知れず」(一)にいる姉の「福子」についてもいえるであろう。「利平」についても、確かに「今でこそ貿易商浪越商店の社長」(一)ではある。しかし、戦後の混乱の中で、特に主な取引先である中国との貿易が再開される見通しも立たず、「店もすこし詰まつて来た」(五)状況にあるこの父親もまた、もはや「利益」などの言葉と縁があるとは言い難い(傍点引用者)。「浪越」の姓も、利平の名と合せることによつて意味を持つていることについては、これまでに論じられておりである。^⑪

つまり、これらの登場人物は、各々の性格や境遇とは相反する意味の名前が付けられているのである。登場人物の名前とその実際の像とは反転させられているといえよう。

一 『聖書』との関係

浪越貞子と『聖書』との関係を考えてみたい。「処女懐胎」には多くの『聖書』の要素が織り込まれている。まず「処女懐胎」という題名そのものが、処女マリヤの受胎という「マタイによる福音書」および「ルカによる福音書」の内容を想像させる。

作品の内容においても、例えば貞子が「都賀伝吉にいどまれ」、また「大江徳雄におそわれ」た日（貞子の言葉で「白昼に物の怪におそわれたような一日」と表現されている）の夜には、「黙示録のケモノ」(三)を夢に見る。「黙示録」とは言つまでもなく『聖書』の「ヨハネの黙示録」を示している。貞子はそのまま「日は闇に月は血に変わらん」というヨハネの黙示録中の「ことば」を思い浮かべるのである。もっとも、貞子は「そのことばは聖書のどこかにあった。祝福のことばであつたか、呪詛のことばであつたか、はつきりおぼえてゐない。」(三)ではある。けれども、この「ことば」はおそらく『聖書』中の「ヨハネの黙示録」第六章一二節から一三節、「第六の封印を解きたまいしとき、我見しに、大いなる地震ありて、日は荒き毛布のごとく黒く、月は全面血のごとくなり」に該当しているのである。¹⁴

また、同じ日の昼に、母親の形見の品である、「プラチナの台に大

きな真珠をはめた」(三)指輪がこわれていることに気付いた貞子は、父親にもらい受けたIHSの文字が象嵌された聖餅箱に指輪をしまいこむ。このIHSとは「人間の救主イエス」の意味である。¹⁵作品のなかでも特に『聖書』との関係が強いのは、以下に引用する場面であろう。

またすこし行くと、みたび、「あなたは世の中のとれにもまさつて、わたくしを愛していらつしやるの。」

「あなたが御承知ないことはありません。ぼくがあなたを愛していることは、あなたがよく御承知です。」

「……」
今度こそ、ほのかではあつても、徳雄はそのことばを聴きとつたやうにおもつた。しかし、それは何といふことばであつたらう。それを心ひそかにくりかへすことは畏ろしく、もう一度口に出して聴き直すことはさらに畏ろしかつた。ともあれ、耳に仄かに聴いたとおもつたそのことばは「わが羔羊をやしなへ」とひびいた。ぞつとした。ふかい懼れである。人間のかりそめに口にすべからざる此世ならぬことばであつた。たちまち、この林の中は聖書の世界の中に割りつけられたやうであつた。
(六)

これは、五月はじめのある日、貞子の妊娠を知つた直後の徳雄が、

偶然会った貞子に話しかける最終場面である。この場面にもおいても、『聖書』の内容が用いられていることを確認できる。この会話の内容及びそれを全く同じように三度繰り返し返すことが、「ヨハネによる福音書」第二章一五節から一七節におけるイエス・キリストとシモン・ペトロの会話のバロデーであることは、多くの先行研究が指摘している。確かに、貞子と徳雄のこの会話はイエスとペトロの会話と酷似しており、「わが羔羊をやしなへ」という文句も、疑いなく『聖書』によるものである。ここで、杉浦晋が指摘しているように、この場面まではマリアとして見立てられていたはずの貞子が、いきなりイエスとして見立てられていることに着目すべきである。貞子がマリアとイエス両者に見立てられていることは、「処女懐胎」においてはマリアもイエスも同じ「聖なるもの」の象徴として扱われており、両者の区別はそれほど重要ではないものとして設定されていると解釈できる。当然のことながら、「処女懐胎」は『聖書』の内容を忠実に描いた作品ではない。このようなマリアとイエス両者への見立てを同時に存在させるという矛盾は、本作と『聖書』そのものとの違いを明確にするための方法といえよう。そしてこのことによって、貞子はイエスにするマリアにしる、徳雄にとつての聖なる女性であることに変わりはないということを確認できるのである。

しかし、この場面において最も重要なことは、徳雄の視点から語られており、貞子自身の心情や意見などがまったく表出されていないことであろう。徳雄は、貞子が日傘のさきで土の上に「いわば貞子の知らないうちに、ひとりでうごいて行くふぜいで」横文字でIHSと書く仕草を見る。また、風が吹きとおった瞬間に、先の方に歩いていく貞子の「まつしるなよそほひ」のうえにIHSの文字が光り出るのを見る。最終的には、先に紹介した会話の後、「わが羔羊をやしなへ」のことは「耳にほのかに聴いた」徳雄は、「たちまち、この林の中は聖書の世界の中に割りつけられたよう」であると感ずるのである。これらはすべて、徳雄個人の受けとめ方に過ぎないものであり、他の登場人物からの視点ではないことに留意したい。そして徳雄は、「御病気はいかがですか。」と、「ことばの調子がこれまでよりもずっと丁寧になって」おり、そのことに「ほとんどみずから気がつかない」様子なのである。

では、徳雄が貞子を聖なる存在と捉えている根拠は何なのであるうか。「処女懐胎」を、観念小説^⑭として捉えれば、貞子は結局、聖母マリアとして昇天したのであると認めることも不可能ではない。しかし、この最終場面までの内容には、幻想的な要素が含まれているとは言い難い。むしろ、塩崎文雄が指摘するとおり、戦後風俗を含めどちらかと言えば現実的なモチーフが、積極的に取り入れられ

た作品といえるであろう。つまり「聖母」が昇天して自分の手の届かない存在になってしまつたというように、徳雄が貞子を一方的に「聖なるもの」として捉えているに過ぎないということ以外に、この見立ての根拠は見出せない。したがって、貞子は徳雄にとつてのみ「聖なるもの」として位置づけられているのである。

ここで「処女懐胎」の以下の箇所に着目したい。

そのむかし切支丹大名などのもつていた品が、聖餅箱である。

この箱はかつてどこやらの売立に出たのを、父の利平が買っておいただが、当時すでにカトリックの教会に通つていた貞子
がもらひ受けて、ずつと手もとにとどめてゐる。(三)

この箇所から貞子は、昔から「カトリックの教会に通つて」いたことが判明する。また、福子の「あたしたちとお附合でカトリックでもいらつしやるし」(三)という台詞からも、貞子がカトリック信者であることもわかる。つまり、貞子には『聖書』の内容についての確かな知識があつたといえるのである。

実際、先にも述べた貞子が悪夢を見る場面においても、「おそろしい夢」に出てきたケモノが「四足で立つて、わつと人間に噛みつく、奇怪な形相」であり、「その上になにか乗っているやつがある」ことを認めただけであるにも関わらず、貞子は「黙示録のケモノ」(三)に似ていると判断している。そして、このように『聖

書』に詳しい貞子が、徳雄の目の前で地面にIHSの文字を書いて見せたり、例のイエスとペトロの問答を再現して見せたりするのである。

これらの行動は、あたかも貞子が無意識のうちに行つたもの、ひいては貞子にイエスが乗り移つて行つたかのような印象を与えている。しかし、これらはすべて貞子の能動的な行動ではないだろう。まず、例の問答はイエスつまり貞子側の発言から始まっている。何より「わが羔羊をやしなへ」(六)という台詞は、貞子とイエスが結び付いているかのように思わせる、重要なものである。しかし、この台詞を用いることこそ、自分に求婚している徳雄に対して、自らを聖なる存在として徳雄に認識させ、結婚を諦めさせるためには有効な手段であろう。この台詞がイエスのペトロに言つたものと同じであると知つたうえで、貞子も用いたとすると、このことは貞子が「聖」なる側面を備えているというよりは、貞子が意図的に『聖書』の内容を踏まえて発言したものとして考えられるのである。

他には「ねえ、発言をゆるしてあげるわ。メンタル・テスト、天皇帝について。打倒派か、支持派か。たつた一言、イエスカノークそれだけ。注釈はいらないわ。」(二)と徳雄に向けた台詞がある。この「イエスカノーク」は、一九四二年二月一五日に日本軍がシンガポールを占領した時に、山下奉文司令官が用いた台詞を踏まえた

ものである。この点からも、貞子の発言が現実をリアルに踏まえただものであることが確認できる。

さらに、最終場面の貞子の服装にも注目したい。貞子は「羽二重のやうなまつしろな生地のスーピース」(六)を着ている。『聖書』においても白い服装は、「マルコによる福音書」第九章二節から三節「六日のち、イエスタだペテロ、ヤコブ、ヨハネのみを率きつれ、人を避けて高き山に登りたまふ。かくて彼らの前にて其の状かはり、其の衣かがやきて甚だ白くなりぬ、世の晒布者も為し得ぬもど白し。」^⑪の記述に見られるように、聖職者ひいてはキリストそのものの象徴の色である。貞子はこのとき、前述の壊れた指輪を入れた聖餅箱を小さい鞆に入れて持っている。指輪にしても聖餅箱にしても、むしろ『聖書』やキリスト教のイメージを喚起させるものである。^⑫この場面における貞子の心情は明らかにされていなが、この点からも、貞子が『聖書』を意識している可能性が窺われ、貞子の行動における計画性が読み取れるのである。

三 貞子の遁走

では、なぜ貞子はこのような遠回しな行動をとったのであろうか。本作において、貞子は一貫して遁走し続けている。まず冒頭場面で、正月の祝いの席から貞子は逃げ出す。他にも、都賀伝吉に挑ま

れて逃げ、徳雄におそわれて逃げる。上野の美術館からの帰り道、福子と徳雄と一緒に乗った満員電車からも逃げ出して途中下車してしまう。最終場面においても徳雄の求婚から逃げ出している。このような貞子の行動は、なかでも美術館で福子と話し合う場面において特徴的である。福子は貞子に、『千載集』の源俊頼と『後拾遺集』の和泉式部の和歌を例にとりながら、「あこがれ」は「漢字でいえば憧憬といふ字を宛てる」ものであり、「あこがれ」は「なにも憧憬するとかぎつたわけじゃない」(四)ものであると説明する。貞子はここではつきりと、「よく判つたわ。それじゃ、あこがれは家出といふことになつちやうやうね。家出もいいけど、わたくし、ただのあこがれの家出よりも、やつぱりあこがれ的に家出したいわ。」と言っている。続いて福子の何に「あこがれているのか」という問に対して「さあ……」と答えている。この発言については、何に「あこがれているのか」貞子自身にもつきりとはわかっていないと受け止められる。

貞子の兄は戦死しており、姉の福子もすでに嫁いでいる。前近代的な家父長制度のもとでは、長男は家長の地位を継ぐことになっていた。その役割を果たさずであった長男の死、長女の嫁入りが意味するのは、浪越家を存続させ、発展させる役割が貞子に委ねられてしまうということなのである。つまり浪越家に残された子供は、

貞子一人きりという状態なのである。ここで、利平は「旧世紀もちこしの制度」である「家の観念」(一)を当然のこととして受け止めて、注意したい。貞子にとっては、父親がこのように考えていることを踏まえたうえでそこから逃げ出すこと自体が、一つの目的だったのである。また、徳雄も「たつた一つちつばけな小屋が立つてゐて、その小屋の中に「貞子がいることを「ぼくの夢」であり、「そのことがぼくたちの結婚といふかたちになつて来る」(一)と語っている。貞子はこの席から逃げ出し、最終場面においても徳雄の求婚から逃げ出している。つまり、貞子は「家の観念」に縛られない自由の身に、「あこがれ」ていたことになり、「家」からの遁走をはかっていたのであると解釈できる。「処女懐胎」における貞子の遁走とは、利平や徳雄に象徴される「家」に縛られることなく生きるという目的のための手段なのである。

ここで、浪越家においては貞子と福子の母親の存在が希薄であるということに留意したい。この母親は一九四七年という作品時間においてすでに故人であり、作品中から得られる情報といえば、彼女の父親の見込んだ利平を婿にとつたこと、「プラチナの台に大きい真珠をはめた」(三)指輪をかつて所有していたこと(そしてその指輪は形見として貞子が譲り受けている)が挙げられる程度である。このことにも、前近代的な家父長制家族の特徴がよく表わされ

ているといえよう。

また、最終場面の、貞子が徳雄と言葉を交わした後に「永遠に逃げ行つてしまふ」(六)舞台である八王子に着目したい。八王子には、利平が「むかし買つておいた、農園の附いた大きな家」があった。しかしこの家は「空襲中万一のときのかくれがと頼んでゐたものだが、とんだまちがへで、意外なところに落ちた爆弾のためにきれいに焼けてしまつた」(一)のである。利平はここに「シャレ工ふうの小屋」を建築中であり、「貞子は八王子の小屋にゐるけしきを、ふつとおもつてみ」(一)ることがあつた。四月の末の場面において利平は福子に、八王子の家について「おもひのほか工事はかどつてゐる」ので、「貞子は一足さきに八王子に住まはせよう」(五)と言っている。

実際に、八王子は空襲の被害を受けた場所である。空襲で壊滅状態にあつた土地が、復興を遂げつつあるという意味において、八王子は「焼跡」に他ならない場所であつたといえる。このような「焼跡」において貞子が徳雄から「永遠に逃げて行つてしまふ」(六)のである。貞子が「家」「家の観念」から逃げ出し新しい生活を始めようとすることと重ねられているといえよう。

なお、貞子が形式的な「家」から逃げ出すことと対照的に描かれている存在が、都賀伝吉の同棲相手の陽子と、貞子の姉の福子であ

る。伝吉と中目黒で同棲している頃の陽子は、いかにも互いに束縛しない関係を築いているように見える。けれども後に「ヤーチャん」(三)と呼ばれる青年と、「正式」(五)に結婚式を挙げるのである。同様に福子にも、徳雄と伝吉に「正式」つてなんですか。どこに出て、がたりともいはずな手続のことをいふのぢやございませぬ。正式つて、結構なものですわね。」(四)と語るように、形式や正式というものにこだわらぬ姿勢が見られる。この二人と対照させられることによって、貞子が「家」から逃げ出すという行動が、より際立ったものとなっているのである。

おわりに

以上、「処女懐胎」の主人公貞子の造形について考察してきた。さまざまな観点から貞子を捉え、いかに貞子が「聖母マリア」という慈母的な性質からかけ離れた女性であるかを確認することができ。しかし、貞子と「聖母マリア」という、その性質において両極端の位置にある二人の女性は、「処女懐胎」中に存在する数多くの『聖書』に関係する事象によって結び付けられている。結果的に、このような「聖母マリア」的ではない貞子が「聖母マリア」と結び付けられているということは、見立てられている対象であるマリアについても「聖母」のイメージを狂わせることになるのである。

「聖母」ということは、あくまでことばの上でしか「聖母」ではない。マリアもまた、このような構造において間接的ではあるがあくまで「聖母」として捉えることができないような存在であることが示されているのである。そして、このことは「聖書」における神聖を無視していることになる。「処女懐胎」は、戦争が終わり新憲法の施行という新しい時代を迎えると共に生じた、家父長制度の崩壊に代表されるさまざまな既成制度の崩壊を描いているといえるであろう。

このようなさまざまな既成制度の崩壊を描くにあたって、「天皇の神聖」の崩壊について述べられることの多かった時代に、あえて『聖書』の神聖の崩壊がモデルに使用されていることは、見過ごすことのできない問題であるといえよう。あえて『聖書』に着目している理由²⁷について、石川淳自身が『聖書』に言及している随筆を参照したい。「乱世雑談」²⁸において、「われわれが聖書を読むのは、じつは自分で再編輯する聖書物語を読んでみるやうなものさ。聖書はいいと、判りきつたことをいふ。それが自分の恣意の解釈に感心してあるのかも知れないのだから、判らないはなしだよ。信仰といふやつはどうにもならぬつよいものだが、それを外の風にあてると一片の物語に化けてしまふ。」²⁹と書いている。また、「文学と生活」³⁰においては「西洋ではパラダイスという観念があつて、その実物が

先のほうで待っていてくれる。いや、待たせたままにはしておけないから、それを現にやらなければならぬということなのですが、そうするとパラダイスにいくまでに何が起こるかということ、聖書でいえば「黙示録」の世界です。「黙示録」の世界を現在に呼び戻すということじゃないけれども、先のほうにあるパラダイスを実現するためにはどうしても「黙示録」の世界を通過しなければいけないという順序になってくる。」と述べているのである。

最後に、「処女懐胎」が連載された『人間』は、一九四六年一月に創刊された文芸雑誌である。周知のとおり、一九四五年一〇月六日に出版事業令・同施行規則が廃止されて出版の自由が認められると、堰を切ったように続々と新たに雑誌が創刊され、また休刊していた雑誌も復刊されている。^④そしてこれらの雑誌の多くは第二次世界大戦中には明るみに出されなかったような思想を大胆に取り扱ったものであった。『人間』もこのような戦後に創刊された雑誌の一つである。『人間』に掲載された他の作品にも、新しい時代の解放感を描いたものを多く確認することができる。このように、雑誌の性格及び出版界の事情を考察することによっても、「処女懐胎」の内容について言及することができるのである。

注

- ① 杉浦晋「作品研究案内 処女懐胎」(『国文学解釈と鑑賞』別冊「無頼派を読む」、一九九八・一)
- ② 佐々木基一「処女懐胎」その他(『表現』一卷四号、一九四八・九)
- ③ 井沢義雄「処女懐胎」(『石川淳の小説』所収、二二九頁～一五〇頁、一九九二・五・一九、岩波書店)
- ④ 野口武彦「見立て創世記の世界」(『石川淳論』所収、二二三頁～二七一頁、一九六九・二・二〇、筑摩書房)
- ⑤ 異同は、初出誌『人間』、初刊本『処女懐胎』(一九四八・二・二〇、角川書店)、『石川淳全集』第二巻(一九六八・五・二五、筑摩書房)との間に多く確認できる。よって本稿では、この三者の本文異同の調査を行った。
- ⑥ 『石川淳全集』第二巻(一九六八・五・二五、筑摩書房)を指す。『石川淳全集』第二巻(一九八九・六・三〇、筑摩書房)はこの本文を踏襲している。
- ⑦ 『石川淳全集』第二巻(一九八九・六・三〇、筑摩書房)の鈴木貞美による解題に「昭和三十六年、筑摩書房版十巻本全集第一巻に収録の際表記表現に手入れがなされた」とある。
- ⑧ 『夷斎鏡舌』所収の「雑談」(『近代文学』四巻二号、一九四九・一・二)、『石川淳全集』第一四巻、五〇頁)
- ⑨ 以下に該当箇所を引用する。「追ひかけて出て、うしろから支えた丸髷に結つたのが、抱くやうにして押しながら、梯子段のきはまで行くと、ねえさん、すみません。」(一)
- ⑩ 「創作合評」(『群像』三巻三号、一九四八・三)において豊島与志雄は「初め読んでいたら、あの若い女は芸者かと思った。」と発言している

る。また、石川淳自身も「雑談」(注⑧)において、『処女懐胎』のはじめね、あれはなんとなく女を二枚ばかり書いて、半年くらゐ放つとした『人間』から頼まれて、それを取り出してあとをつづけた。はじめの二枚は、お嬢さんにもなるが芸者にもなるやうなもので、イメージだけでこれからどうなるといふ予想なしですね。」と語っている。

- ⑪ このことについては、神谷忠孝が『処女懐胎』論(森安理文・本田典国編、石川淳研究)所収、八三頁・九三頁、一九九一・一一・三〇、三弥井書店)において詳述している。

一度目の文明開化、すなわち日本の近代化路線を象徴するのは、福子と貞子の父、浪越利平が貿易商だということである。貿易の相手国は「虚山」、すなわち中国であったと書かれている。つまり中国大陸を基盤に利益を得た浪越利平(海を越えて利益を得たという意味)は日本の「富国」の象徴である。

- ⑫ 「マタイによる福音書」第一章一八節から二〇節までがその場面を描いている。

イエス・キリストの誕生は、左のごとし。その母マリヤ、ヨセフと許嫁したるのみにて、いまだともにならざらしに、聖霊によりて孕り、その孕りたること顕われたり。(『新約聖書』一九四八・一一・一〇、日本聖書協会)

- ⑬ 『新約聖書』(一九四八・一一・一〇、日本聖書協会)による。「処女懐胎」本文中の、「日は間に月は血に変わらん」(三)と同じ表現がなされている。「聖書」は管見の限りでは見つかからないが、内容のうえでは同じ箇所を指していることは明らかなので引用した。

- ⑭ 杉浦晋「石川淳『処女懐胎』試論」(『稿本近代文学』一九九集、一九九四・一一)

- ⑮ 神谷忠孝の「『処女懐胎』論」(注⑪)において、I H Sの文字の意味

は「人間の救主イエス」の他に、「この印のもとに汝勝たん」(In hoc signovincis)と「ここに救いあり」(In hoc salus)があることが述べられている。

- ⑯ 以下が、「ヨハネによる福音書」第二章一五節から一七節におけるイエス・キリストとシモン・ペテロの会話である。

かくて食してのちイエス、シモン・ペテロに言いたもう、「ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝りて我を愛するか、ペテロ言う、「主よ、しかり、わが汝を愛することは、汝知りたもう。」イエス言いたもう、「わが羔羊を養え。」また二度言いたもう、「ヨハネの子シモンよ、我を愛するか。」ペテロ言う、「主よ、しかり、わが汝を愛することは、汝知りたもう。」イエス言いたもう、「わが羊を牧え。」三度言いたもう、「ヨハネの子シモンよ、我を愛するか。」ペテロ三度「我を愛するか」と言いたもうを愛して言う、「主よ、知りたまわぬところなし、わが汝を愛することは、汝知りたもう。」イエス言いたもう、「わが羊を養え。」かく言いてのち彼に言いたもう、「我に従え。」(『新約聖書』一九四八・一一・一〇、日本聖書協会)

- ⑰ 後藤恵美子「石川淳『処女懐胎』論」(『日本文学論究』五六冊、一九九七・三、国学院大学)・杉浦晋「石川淳『処女懐胎』試論」(注⑭)などの論で述べられている。

- ⑱ 注⑭に同じ。杉浦晋はその解釈として、貞子が「肉になったことは」すなわちイエスを生み落としたとみなす、もしくは貞子のイエスへの見立てそのものが貞子の昇天を暗示しているとみなすとしている。

- ⑲ 例えば、佐々木基一は『処女懐胎』その他(注②)において、『処女懐胎』には人間が描かれてはいない。「白描」と同じくそこに描かれたものはすべて観念であり性格であり性であり世代であり時代であると

「いう抽象物に外ならぬ。」と述べている。また、井沢義雄は「処女懐胎」(注③)において、「処女懐胎」の主題は「愛は精神の努力によって自証されるものとしてこの努力のなかにみずから解消し、一方恋愛は精神の受難として肉体に課される。」ことであると述べている。

⑲ 塩崎文雄「石川淳・処女懐胎」『書書』、『人文学部紀要』一九八二・三、和光大学)

⑳ 注⑬に同じ。

㉑ 日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委員会編『キリスト教大事典』(一九六三・六・三〇、教文館)に、「指輪を装身具、封印結婚のしるしなどに用いた古代ローマの風習は、教会にも取り入れられた。」と記されている。

㉒ 実際に八王子の受けた空襲については、『ドキュメント東京大空襲』(警察文化協会、一九六八・一一・三、雄鶏社)などに、のべ七日間にわたり被害を受けたことが記録されている。なかでも、八月一日の空襲において受けた被害については、創価学会青年部反戦出版委員会編『炎の桑都——八王子空襲の記録』(一九七六・八・一、第三文明社)に「焼失面積は、市街地面積五五〇万坪に対し約一八パーセントにあたる九九万坪であり(略)」とあるように、かなり大きいものであったことがわかる。また、一九四六年から戦災復興区画整理事業に基づいて駅周辺から新しい町づくりが開始されている。

㉓ ここでの「焼跡」とは、新たな再生をはかる場所であると言える。安藤始「焼跡と「聖」のイメージ」(『石川淳論』所収、一三一頁)一四八頁、一九八七・五・六、桜楓社)に、石川淳作品における「焼跡」についての言及が見られる。

たしかに荒れた風俗は現実そのものであって、このことを作者もまた読者も消しさることはできない。しかし、石川淳において、この

ような、もしくはこれに類似した焼跡的なイメージは、この一時期だけのものではなかった筈である。彼のイメージの世界は、時代と描写の内容こそ異なっているものの、処女作以来一貫していたのであったからである。(略)「焼跡のイエス」等における焼跡の世界は、現実として当時の巷が焼跡であったことと重なりあっているのであって、これが「普賢」の市井であっても、江戸天明期や「紫苑物語」の古い時代であっても、石川淳の中では同じ基盤の上でのイメージから発したものであった。

㉔ 『八王子市史』上巻(一九六三・三・三一、八王子市役所)などに紹介されているように、八王子の産業の中心は織物業、繊維業であった。これが終戦を迎えた時には、空襲による工場の焼失などのために壊滅した状態であったことは、八王子という土地が、まさに「焼跡」であったことを示唆していると言える。

㉕ 作品内時間である一九四七年が「処女懐胎」の作品世界全体に深く関わっていることは、注⑭で挙げた塩崎文雄の論に詳しい。これに付け加えて、「洋裁ブーム」の流行を指摘したい。

一九四五年に敗戦を迎えた当初は、物質不足のために衣生活そのものは戦争の面影をひきつづけたものであったが、次第に若い女性を中心に洋装への関心が高まっていくのである。陽子が「都賀洋裁研究所」(二)を経営しているという設定も、おそらく戦後風俗の一例として、このような風潮を取り入れたものである。陽子の経営する「洋裁研究所」については、以下のような具体的な説明がなされている。その結果、「洋裁研究所」のリアリティーが確保されていると言える。

実際に、陽子は敏捷からだのうごかたで、ミシンも器用につかつて、あたらしい仕立物はもとより、古著のつくるひもものまでもいとはず、結構これが商売になって、通つて来る女弟子が三四人、そ

の弟子に仕事をまかせて、当人はむしろ外まはりにいそがしく、洋服生地を取次とか衣裳の売買とか別口の収入もあつて、去年のかせぎ、みづから称して十萬円あまり、ことは二倍にも三倍にもなるといふ胸算用であつた。(二)

また、一九四七年とは、五月三日に日本国憲法の施行、続いて二月二日に改正民法の公布が行われた、つまり家父長制度が廃止された年なのである。このことを踏まえ、本稿で述べたような貞子の「家」に縛られることなく自由に生きる行動が「処女懐胎」作品内時間に即したものであることがわかる。

⑳ 石川淳がキリスト教信者ではなかったことは周知の事実である。石川淳自身も「ラゲ工神父」(「博多の一挿話」の題で発表、『旅』一五巻一二号、一九三八・一二)において、「決してクリスチャンではないわたしがうつかりフランスの小説のはなしなどをすると」「わたしは信者ではなかったが」などと述べている。

また、同じく「ラゲ工神父」において、「ジョリイ師の年少の友人として教会にはよく出入してゐた。」とも述べていることから、一九二四年から一九二五年にかけて福岡高等学校に勤務していた時期に、同僚であつたジョリイ神父と交際していたことが明らかになる。この頃に、キリスト教や「聖書」に接触する機会が多かつたと考えられる。

㉑ 『文学界』第五卷第八号、一九五一・八(『石川淳全集』第三卷、一六二頁～一七〇頁)

㉒ 岩波書店PR誌『図書』第三二七号、一九七六・一(『石川淳全集』第一六卷、六〇二頁～六〇九頁)

㉓ 講談社編『昭和二万日の記録第七巻・廃虚からの出発』(一九八九・二・二四、講談社)には「終戦の日以来、二〇年中に復刊・創刊された雑誌は一九〇誌あまり(略)明けて二年になると、創刊誌は、総合雑

誌をはじめ児童誌、婦人誌、文芸誌、スポーツ誌などあらゆるジャンルに波及した。一月から半年間の創・復刊誌はおよそ四〇〇誌」という記録がある。

㉔ 阿部知二、「あらまんだ」(『人間』一九四七・六)、三島由紀夫、「夜の仕度」(『人間』一九四七・八)などを挙げる事が出来る。

(付記)

本稿で引用した石川淳の文章は、『石川淳全集』全一九卷(一九八九・五・三〇～一九九二・一二・一五、筑摩書房)を底本とする。なお、引用に際し旧漢字は新漢字に改めた。